

cR

Centro
de Referência
Paulo Freire

**Este documento faz parte do acervo
do Centro de Referência Paulo Freire**

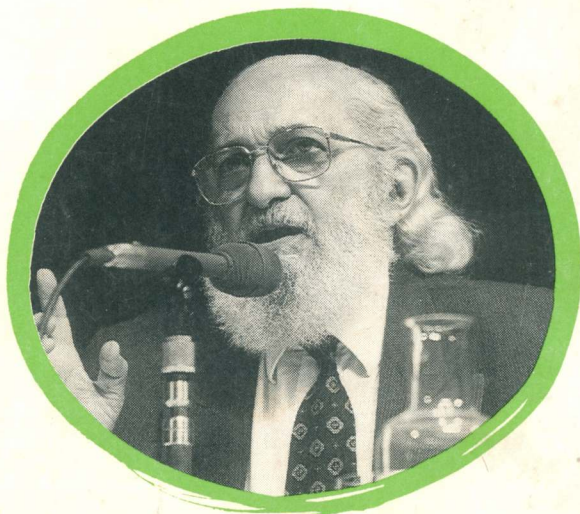
acervo.paulofreire.org



InstitutoPauloFreire

おおさかの対話

パウロ・ブレイレ氏 大阪訪問報告



58



国際識字年推進大阪連絡会

もくじ

ごあいさつ.....	2
パウロ・フレイレ氏経歴.....	4
パウロ・フレイレ氏の足あと.....	5
開催要綱.....	6
記念講演.....	7
パウロ・フレイレ氏をお迎えして／7	
「すべてのひとに文字を」／11	
識字教室訪問.....	32
フレイレ夫妻を迎えて／32	
フレイレさんとともに.....	42
フレイレ氏と共に／42	
オモニたちのパワーを糧に／44	
勇気づけられた／46	
「ひと」らしい人／48	
パウロ・フレイレ氏とお会いして／50	
反差別の信念、あたたかさ、そして企画力／52	
フレイレ氏との出会い／54	

ごあいさつ



国際識字年推進大阪連絡会

代表幹事 元木 健

一九九〇年は、国連が定めた国際識字年、(International Literacy Year)です。世界には読み書きができない人々が八億八千九百万人もいます。実に四人に一人が読み書きに不自由しているのです。このような実態をなくし、二〇〇〇年までにすべての人々が読み書きをできるようにしよう、そのための行動を起こそうというのが、この国際識字年なのです。

読み書きができなければ、社会への参加も難しくなります。時には文字が読めないためにいのちをなくしかねないなど、まさしく識字は基本的人権であります。

世界には、様々な民族の文化を守りながら識字活動をすすめている国々があります。日本においても、様々な理由で学校に行けなかった人々が、識字活動に取

り組んでいます。これらの取り組みを支え、だれもが読み書きをできるような社会を、すべての人々の力でつくりだすための大切な年です。

このような時に、世界の識字活動の第一人者であるパウロ・フレイレ氏を大阪の地にお招きし、国際識字年キャンペーン講演会「すべてのひとに文字を、パウロ・フレイレ氏へ解放のための識字へ」を開催することができました。人間の解放をめざす氏の識字理論と実践は、国際識字年に取り組むすべての人々に確信と展望を示し、大きな力を与えていただきました。

ぜひ、多くの方々にもこの思いを共にしていただきたいと願い、冊子にまとめることといたしました。

パウロ・フレイレ氏の来阪にあたり、ご協力頂きました社団法人日本ユネスコ協会連盟、読売新聞社の皆様に、この場をおかりして厚く御礼申し上げます。

この冊子によって、国際識字年の取り組みが、より多くの人々の協力によつてすすめられることを期待し、ごあいさつとさせていただきます。

パウロ・フレイレ氏経歴



本年、Paulo Regius Neves Freire

一九二二年九月一九日ブラジル生まれ、
レシフェ大学法学部卒。一九四七年
からペナブキョ地域行政府教育局に

勤務、五六年から五八年には同教育局長を務めた。

五四年から六〇年にレシフェ大学（現ペルナブコ大学）で教育哲学と歴史を教えた。同大学で教育博士号を取得。

六三年に全国文化委員会の会長と全国識字教育計画の企画官になった。六四年から六九年までチリに滞在し、ユネスコの専門家として文部省の成人識字教育、農業開発人民教育研究所の顧問を務めた。

この間、サンチャゴカトリック大学で教え、南米社会科学学会や南米経済社会計画研究所のセミナーを担当した。また南米社会研究所でも教えた。

六九年から七〇年にハーバード大学で、七二年から七四年にジュネーブ大学教育学部で教えた。七〇年か

ら八〇年にジュネーブの世界教会協議会教育局の特別顧問を務めた。

現在、米国のマサチューセッツ大学で毎年セミナーを開いている。

八〇年にブラジルに戻り、サンパウロカトリック大学や国立カピナス大学で教えている。

彼はサンパウロのヴェレダ教育研究センター設立者であると同時に所長である。

彼の教育理論と実践は高く評価され、八六年にユネスコ平和教育賞を受賞した。

著作は多くの言語に翻訳され、世界で広く読まれ、教育界のみならず、開発団体や解放団体に大きな影響を与えている。日本で翻訳出版されているのは、「自由のための文化行動」「被抑圧者の教育学」（すべて亜紀書房刊）。

パウロ・フレイレ氏の足あと

時刻	スケジュール
8月30日 PM 8:35	大阪空港到着 ホテルへ出発 全日空シェラトン
8月31日 AM 10:30	ホテル出発 府立労働センターへ 国際識字年推進連絡会との懇談 記念写真
11:00	部落解放同盟中央本部の要請 通訳うちあわせ
12:00	昼食
PM 1:00	控え室
	あいさつ 大阪府教育長 大阪市教育長
1:30	国際識字年キャンペーン講演会開会 講演
2:00	講演終了
4:00	花束、記念品贈呈
4:10	降壇
4:30	移動

時刻	スケジュール
5:00	夕食 新大阪シティプラザ
6:30	移動
7:00	日之出解放会館到着 日之出地区と読み書き教室の説明 見学
	紙芝居上映 懇談 贈り物、歌 記念写真
8:30	日之出解放会館出発 全日空ホテルへ ホテル到着
9:00	京都へ向けて出発
9月1日 AM	

開催要項

国際識字年キャンペーン講演会

すべてのひとに文字を

パウロ・フレイレ氏　「解放のための識字」

【主催】

- ・日本ユネスコ協会連盟
- ・読売新聞社
- ・国際識字年推進大阪連絡会

【後援】

- ・大阪府・大阪府教育委員会
- ・大阪市・大阪市教育委員会

【日時】

一九八九年八月三十一日　午後一時～四時〇〇分

【場所】

大阪府立労働センター　二Fホール

（地下鉄谷町線天満橋駅、京阪天満橋駅下車、西へ徒歩五分）

【規模】

八〇〇人

【参加費】

三〇〇円（資料代を含む）

【内容】

時刻	プログラム
一〇〇〇	受付
一一三〇	開会あいさつ 国際識字年推進大阪連絡会 来賓あいさつ 大阪府教育委員会 大阪市教育委員会 基調提案
一二四五	「識字」スライド（ユネスコ制作）上映 パウロ・フレイレ氏の紹介 パウロ・フレイレ氏の講演 「すべてのひとに文字を」 閉会あいさつ
四〇〇〇	

パウロ・フレイレ氏をお迎えして

大阪大学 元木 健

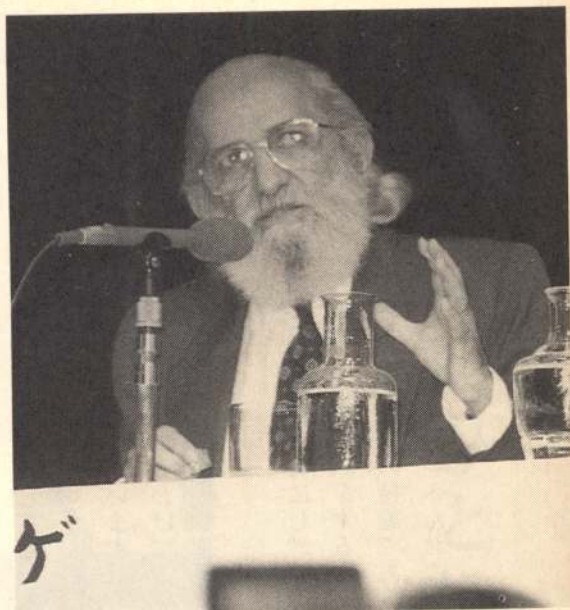


大阪大学の元木でございます。先程からゲストの方々のごあいさつにもありましたように来年は国連の国際識字年でございます。言いかえれば、識字を行う者が主役になる年と言ってよろしいかと思えます。この大阪におきましても、関係諸団体が集まって連絡会を結成し、来年に向けての取りくみを始めることになったわけですが、ちょうどその時に日本ユネスコ協会連盟、そして読売新聞社の共催で、パウロ・フレイレさんを日本にお招きするという計画を伺いました。そこでこの機会にぜひ大阪にもいらして頂きたいと働きかけ、大阪府・大阪市

のご援助もあつて、今日のこの会が開かれることになつたわけでございます。来年の国際識字年への取りくみへの第一歩ということでございます。そして今日は、そうした識字活動を行うものが主役である年にふさわしく、実際に識字の学習にとりくんでおられる方も多数この会場に来ておられます。また、そうした識字活動を援助する実践にとりくんでおられる方もたくさんいらしていただいております。まず、パウロ・フレイレさんのことにつきましては、みなさんのお手元にある「全ての人に文字を」という冊子の中で六ページにその人となりについて書いておりますので、今さらご説明するまでもないと思いますが、若干付け加えますと、現在はサンパウロのカーピナス大学の教授をしておられる。また、サンパウロ市の教育長官という立場におられまして、これまでのフレイレさんの長い識字活動の実践をふまえて、更に新しい創造的な識字活動にとりくんでおられるところであります。今日はそうしたお話も充分にうかがえると思っております。なお、私事にわたって恐縮でございますが、私、一二年前に一年

間海外生活を送つたことがあります、その時、アメリカやイギリスの大学で、大学院や学部で授業でテキストとして最も使われていたのが、フレイレさんの本でありました。その時に私は、どうも一九七〇年代に世界の教育学が大きく変わってきてるのではないかということを肌でもって実感したわけでありました。

言うまでもなく、それまでの教育学の研究はもっぱらヨーロッパやアメリカの学者が書いたものを読み、それを引用して論文を書くということであつたわけですから、七〇年代に入つて第三世界の立場からの提言、第三世界からの教育学が抬頭し、とくにフレイレさんの本が教育学の研究にたずさわるものに最も多く引用され、教育学を志す者に最も多く読まれた本だということでもあります。そのフレイレさんを今日ここにお招きいたしました。私どもの教育学の大先輩であり、そして識字活動の実践を通して教育学を築きあげた、そのフレイレさんの本領をうかがえるわけでございます。今日のフレイレさんの講演をきっかけにして、日本で識字問題について



ての真剣なとりくみが始められるということを期待するわけであります。国際識字年とは、先程からごあいさつにもございますように、決してこれはただお祭りをするということではありませんで、むしろ来年が世界の識字の再出発の年であり、ユネスコでは、二〇世紀の間に世界の非識字者をなくす行動計画の第一年であるということです。我が国では、

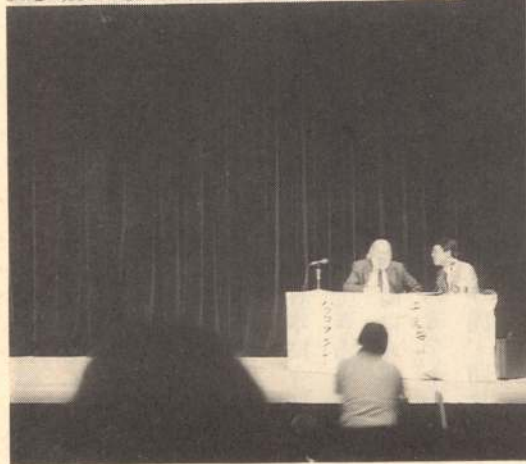
とかく識字問題とは過去の問題である、あるいは開発途上国の問題であると受けとりがちでありますけれども、決してそうでないことは今日お集まりの方々を含めて、この西日本を中心に全国の被差別部落に識字学級があること、そしてまた、夜間中学という存在があつて、そこでは在日韓国・朝鮮人の方々を中心にするたくさんの方が学んでおられるという現実があるわけであります。そして、そうした識字学級や夜間中学校だけでは実は決してなく、そこに通つてない人で、実は我が国に文字の読み書きに不自由している人は意外に多いのではないかということとを推察される確かな統計もあります。現在では我が国ではそうしたきちんとした統計はとられていないのですが、一九五五年に文部省自身が行つた調査の結果をみますと、当時の一五歳から二四歳の青少年の一分は文字の読み書きに非常に困つていというデータがあります。もしその当時から、その人々の識字能力が高まっていなかったら、現在の五〇歳代の人の一分は本当に困つていというところであります。そうした現実をふまえて、我々は更なるとり

くみを進めたいと思うわけであります。ところで、ユネスコは、国際識字年のいわば発案者であり、そしてこれまでも識字運動の長い実績をもっておりま
す。そのユネスコが、私どもの今日のこの試みに対
しましても、スライド、あるいはパネルの提供をし
てくれているわけであります。なお、最後に付け加
えますと、この識字問題、識字活動とは単に文字を
読み書きできればいいということでは決してないわ
けであります。そのことを今日のフレイレさんの話
から充分お聞きいただければ幸いです。そ
れでは今からフレイレさんの講演に入るわけでござ
いですが、今日の講演の形は少し違った形で進めさ
せていただきたいと思います。

最初から最後までずっとフレイレさんにしゃべつ
ていただいてそれを逐次平沢さんが通訳をするとい
う形ではなくて、フレイレさんの教育の持論である
「伝達より対話を」ということで、たいへんおこが

ましくうございますが、私がフロアのみな様方に代
わって質問をし、それにフレイレさんにお答えして
いただく、そしてまたそれに私が若干コメントを付
けるという形で進めさせていただこうと思っており
ます。もちろんフレイレさんは今日、大阪のどうい
う方々がこの会場にいらしておられるかということ
は充分ご承知で、分かりやすいお話をして下さると思
いますけれども、しかしやはり彼と我々との文化の違
いということもございまして、なかなか分かりにくい
面もあるかと思えます。大変せんえつでございます
が、私が少しでもそういうことを補足しながら、今
回の講演会が進められればと思ひまして、対話形式
の講演会というふうにしていきたいと存じます。今
日のこれからの二時間を、三つか四つの文節に分け
てお話しをいただく形になると存じます。よろしく
お願いいたします。

キャンペーン講演会
のひとに文字を
イレ氏 — 解放のための識字 —
日本ユネスコ協会連盟 共産新聞社 国際識字推進文化政策研究会



「すべてのひとに文字を」

パウロ・フレイレ

元木..

それではフレイレ先生。まず今日のフロアの方々が最も先生からお聞きになりたいと思っていることは、やはり先生がこれまで取りくんでこられた識字の実践そのものでございます。先生がどういう理念でもって具体的にどういうことに取り込まれ、そして現在またどういうことをなさってらっしゃるかというのを、できるだけ手短かにお話しいただければ幸いです。よろしくお願いします。

フレイレ..

元木先生どうもご紹介ありがとうございました。妻と私を、今回この様に日本にお招きいただいたこ

とを大変うれしく思っております。また冒頭にあって、ブラジルは日本と大変緊密な関係をもっているということを申しあげておきたいと思います。私が住んでおりますサンパウロ市は、大変日系人が多いところです。街を歩きますと毎日のように日系ブラジル人の人たちと出会います。そういう意味で、その日系人の人たちがいらしたこの日本に今回初めてまいりまして、みなさんとお話できるということを大変うれしく思います。また同時に来年バンコックで「全ての人に対する教育」というテーマで会議が開かれますが、それに先だって今回、同じようなテーマで大阪のこの会議に参加できることをうれしく思っております。

そして又、私の過去、また現在の経験について、みなさま方にお話しできることを光栄に思います。もちろん限られた時間の中で今おっしゃったテーマ全てをお話するのは大変なことですが、ともかくご希望にそえればと思います。

今から三〇年以上も前、まだ私がもっと若かったころですが、ブラジルの非識字者に対して文字の読

み書きを教える新しい方法はないだろうか、いろいろ考えておりました。それ以降のさまざまな経験の中で、私が最も基本的だと考えております。二つか三つの点にしばって、まずお話ししたいと思います。つまり、成人に対する識字をどのように進めるのかということです。

まず、ことばを読むということの意味をよく考えてみますと、必ずその前に世界を読む、世界の現実を知るということがともなっている必要があります。つまり人間というものは、自分をとりまく世界や現実について、読む、つまり知ることができるようになって、そして文字を読む、ということができるようになるのではないかと、私は考えています。ですから、言葉Wordを読むということと、世界worldを読むということは、これは絶対に対立させてはならないことだと思っています。少し例を挙げて考えてみたいと思います。例えば差別を受ける立場にある人を考えてみますと、この人は文字の読み書きができなくても、それ以前にすでに自分が差別される存在であり、差別の現実がまわりにあることを読む、

つまり知ることはできます。だから、何かを読んで初めて差別がわかるようになるのではなく、読む行為の前にすでに差別を知っている、その現実がわかっているということがあるのではないかと思います。

第二点目は、現実を知る、世界を知ることとは、常に政治的な行為であり、その裏に必ず、イデオロギーがひそんでいるということです。これは世界を認識する、現実を知るという時に、中立的な立場や中立的な姿勢は、存在しないということです。世界を知ることとは、その人が意識するか、しないかに関わらず、必ず裏に政治の問題、イデオロギーの問題がかくされています。

それから三点目は、例えば識字の指導者の立場を考えてみますと、文字を教えること自身が、政治的な行為になっていると、いうことです。

つまり、教える人が政治的に全く中立の立場に立つということはあり得ないと思います。これは別に文字を教える時に指導者が自分の政治的なイデオロギーや立場を、学ぶ人に意識的に押し付けているという意味ではありません。しかし客観的に見ると、

必ず教える人は政治的に中立な立場をとり得ない形で文字を教えているということです。

もう少し文字の読み書きを教えるというテーマを深く考えてみたいと思います。文字の読み書きをするということと世界や現実を認識するということは決して二つに分けて考えてはいけないということを申し上げました。

これをもう少し具体的に言いますと、例えば、日本であってもブラジルであってもいいのですが、何人かの文字の読み書きに困っている非識字者が、文字の読み書きを勉強してみたいといってやってきたとします。しかしその時点で、すでにその人たちは、その現状における現実認識を何らかの形で、もっているはずです。例えば、「自分たちは差別されている」「自分たちは世の中から排除されている」というような一定の認識をもっています。しかしこのように搾取されていたり、支配されていたり、差別されていたりする人たちが、最初に到達する考え方というのは、自分たちが差別されたり支配されたりしているのは、これは神がそのように望んだからそうなん

たんだとか、あるいはこれは自分たちの運命なんだというものです。そこで文字を教える者の立場は、そのような形で、限られた現実の読み方をしする非識字者の方々に対して、それは決して神がそのように望んだから搾取されたり、そういう状況になつて



いるのではなくて根本的な原因が政治や社会のシステムの中にあるのだという所へ高めていく。これこそが文字を読み書きするという過程と並行して行なわれなければならないと思っています。

もう一つ、これに関連して、例えば何人かの人が文字の読み書きを勉強したいということと私の所にやってこられたといたしましょう。今、私は世界や現実を認識すること、そして自分をとりまくものが政治的な現実であるということとをきっちり読むことができるようにすることが大切だと申し上げました。しかし、勉強したいと言ってこられた方は、実際に読み書きができるようになりたいわけですから、読み書きができるように指導できなければ、教師としてはダメなわけです。だから、世界を読むということと、文字を読むというこの二つの側面は、どちらか一方でいいというわけではなく、両方とも統合されていなければならないと思います。そういう意味で、私たちが文字の読み書きを教える時に、その出発点で、最も大事なものは今、文字の読み書きを勉強しようとしている非識字者である人達が、今

持っている言葉、その人達が今生きている文化、そこから識字の教育が発しなければならぬということです。教える者がもっている言葉を、そのまま押し付けるような識字であってはけません。というのは識字教育において、教える者と、そして学ぶ者の間には社会的な階層の違いがあり、そこには言葉や文化の違いが存在します。だから教える者が持っているものから出発すると、学ぶ人達ももっているいろいろな希望や夢や恐れや疑いといった問題意識を全く考慮しないようなプログラムを作ってしまうわけです。そうすると全く非識字者の人達の文化的なアイデンティティーを無視した識字教育になってしまうということです。ですから、かならずや識字教育は学ぶ非識字者から出発して、それに対して教える者が何らかの助けをすることによって、言葉や言語を学習していくことでなければいけません。これが識字教育だと思います。ですから、内容も出発点も、全てが非識字者から出たものであり、そこから始まるのが原則だと思います。

それから最後の点になりますけれども識字の学習の

プロセスにおいて非識字者つまり、文字の読み書きを学習する人たちが、知ることを通じ、学習の過程を通じて自分たち自身の新しい認識を創造していくということが大変大事だと思います。識字教育というのは非識字者が教室にやってきて、まるで病気を治すために、アスピリンなどの薬を飲むような形で、先生から言葉を教わり、それを吸収するということであってはいけないと思います。むしろ識字というのは、文字の読み書きのできなかった人たちが、自分たちのもっている言葉に対する知識というものを基礎にして、その上に新しい言葉を築き上げていくという行為だというふうに思います。これはある意味で、物の読み書きをするという権利でもあるし、又そのような権利を獲得するプロセスでもあるし、自信をもって自分の言葉を話すということ、そして自分たちの認識を作り上げるといふ極めて知的な行為です。逆に教える側にとっては、大変な責任を要求しますし、又学ぶ人たちに対する心からの尊重の気持ちが必要られます。

例えば、教える者が学ぶ人たちからいろいろ出さ

つしやっていることであります。それと同時に、そういう識字の学習はまさに、その地域において、その人たちのもっている言葉、文化から出発するものでなければならぬ。外からそれは与えるものであつてはならない。あくまでも識字の活動を行う者が学習の主体であり、まさにそういう自発的・主体的な意志をもつて、そしてその言葉はその人たちの文化から発するものでなければならぬ。それだけに識字を指導する先生は大変な力量がいるのだということでもあるわけであります。そこで政治的立場とこの言葉を使われましたけれども、何よりもこれは、今、部落解放運動で言われている、社会的立場の自覚、なぜ自分が文字を知らなかったのか、そのことを深く認識するということであります。フレイレさんは、いつもはこれを「意識化」という言葉を使つておっしゃるのですが、今日はあえてその言葉はおさけになったようです。実はフレイレさんの教育哲学の一番中心になるのか、その意識化という言葉であります、これはまさに社会的立場の自覚というふうにも言いかえてもよろしいかと思ひます。

それと同時にフレイレさんの識字活動とはまさに解放のための識字活動であるということでもあります。もはやそれ以上、私が申し上げることはないと思ひます。最後にサンパウロのことにお触れいただいたわけですが、今、現在フレイレさんが実際に取りくんでおられること、あるいはやろうとしておられること、新しいテクノロジーを使つてというようなことをおつしやいましたが、それをもう少し詳しくお話しいただけるでしょうか。

フレイレ

先程のお話ですが、今、サンパウロ市の教育長として、特に意識しているのは、一つは学校、とくに小学校という場で何が起るのかという問題とそれから、インフォーマルな教育と呼ばれる学校教育以外の分野、この二つの面でどのようにとりくむかということとです。特に小学校という所で、何をしたいかということを少しお話してみます。今、私たちは（なぜ「私たちは」と申しますかと言うと、私一人がやっているのではなくて、多くのすばらしい人達とチームでとりくんでいるからです）学校を変え



ようというとりくみを始めようとしています。

ブラジルという国は、これまで、教育を考えます
いつも、権威主義という側面と、エリート主義と
いう側面が、二つ合わさって存在してきました。私
たちはこのエリート主義および権威主義と闘おうと
思っています。これらを乗り越えて、本当に民主的
で開かれた学校を作りたいと今、考えています。こ
の学校は何をする所かということですが、学ぶこと
の楽しさを子どもたちに教えられるような学校、つ
まり、ハッピーな学校を作りたいと思っています。

物を知ることとは、確かにある程度の困難をと
もないますし、時には苦痛をともないます。しかし
その困難と苦痛を経て、本当に知ることができたと
きに、その瞬間、大変すばらしい喜び、美しい一瞬
がおとずれます。私はこれをいつも経験するわけだ
ですが、例えば、ある一つの問に対して、三時間も四
時間もいろいろ考えます。色んな本を読んだり、考
えたりするけれども答えがみつからない。すると疲
れてきます。けれども、ある時に分かったという瞬
間が訪れます。それが私を知ることの喜びではない

かというふうに思っています。物を知ることというのは、これは詰め込むことではなく、発見するということか、自分で考えて、あることを知ることです。これは苦しいけれども楽しいことだと私は思っています。その楽しさを教えられるような学校にしたいと考えてるわけです。だから教師が、子どもたちを本当に愛して尊敬するというか、そういう学校にしていきたいのです。

学校は、ある程度の権威を持つ必要がありますが、だからといって権威主義になってはいけないと思います。又、自由を主張する時にも、それが単なる放任になつてはいけないと思います。一定の限界をもちつつも、自由をより拡大するために権威を用いる。つまり「責任ある自由」を作りあげるために、自由を行使する、そんな学校を作りたいと私は思っています。

確かに、この様に学校を変えろということは簡単ではありません。しかし今、カリキュラムを変えようと努力しております。その一端をご紹介しますと、サンパウロという地域には、ブラジルで最も大きなサンパウロ大学と、それからブラジルで最もすぐれ

た大学の一つとされるカトリック大学、それから私がお教えております。カンピナス大学と、三つの大学があります。この三つの大学の科学者や教授が集まり、八〇人でチームを作り、これらの科学者・学者たちは、ボランティアで、つまり特別な報酬なしに物理、数学、哲学、言語、生物学、あるいは美術教育といった違った専門をもつ人々でチームを作り、どのようなカリキュラムにしなければいけないかということを今議論しています。又、同時に一方では子ども達との対話ということもやっています。例えば一二歳からそれ以上の子ども達と色々なセミナーを開いて今、学校に関して思っていることを話してもらったり、学校のイメージを絵やその他の形で表現するような場をもったり、あるいは、こんな学校にしてほしいというような要求を聞いたり、というように色々な子どもたちの意見も吸収しています。又、学校の先生方とも同じような事をやっております。例えば、つい五日程前ですが、テレビで三万人の教師を対象にして、三〇分の番組を放映しました。どのような学校にしていくなかというように、このことをテ

レビのある番組を使ってデイスカッションしました。そして先生方が学校の改革についてもっているイメージについて色々な意見交換をしました。ですから学校改革といっても、私たちだけが、ただ少数でやるのではなく、大学の極めて高度なレベルでそれぞれの専門をもって研究していращしやる方の意見もお聞きしていますし、又小さな子ども達からも意見を聞いていますし、更に学校の先生や一般の人々、また色々な地域で会合を開いて聞いたりしています。ある所では一、〇〇〇人の市民と対話をするというようなこともやりました。このような形で批判を聞いたり、要望を聞いたりして学校改革について今検討しています。

そして又、先ほど申し上げました三つの大学を通じて、教師を生涯にわたって訓練するようなプログラムを作っていきたいと思っています。その中では、グローバルな見かたをもつて、学校教育にあたるような先生を作っていきたいと考えています。又、自分の教えている教科のわく組みだけにとらわれるのではなく、色々な分野をこえて知識を拡大できるよ

うなプログラムを作っていきたいと思っています。このような全体のプログラムはまだ後三年半かかりますが、その中で三万人の教師を再教育し、新しい学校改革に向けて準備していきたいし、又、新しい学校を一〇〇程新たに作ることも計画しています。

実は今私、六七歳であります。そしてこの六七歳という年になって初めて、このように学校教育そのものを大きく作り変える責任を手にしました。大変興奮しています。六七歳ですけれども自分はまだ二五歳のつもりです。やる気満々ですし、これから色々困難はあるでしょうが、それと闘うことに充分、準備はできています。ぜひ、このようなことが背景となつて、今、私がとりくんでいるというのをみなさんにお話ししておきたいと思います。

元木

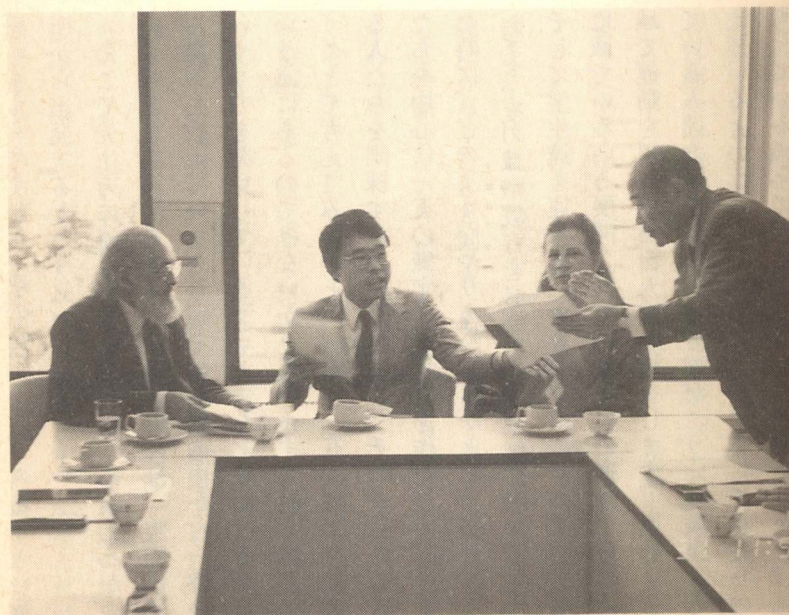
今お話がありましたように、フレイレさんは六七歳になって初めて公的な立場といえますか、政府から一つの仕事をまかされる立場にお立ちになったというお話でありました。ただそれも決して平坦な道ではないようでして、そういう教育長官という立場

にありながら、しかしやはりサンパウロ市の中でフレイレさんがあまりにも被抑圧者の立場に立ちすぎるといふことで、そうとう新聞や何かを通じての批判もあるとうかがっております。そういう中での闘いであるわけです。

そこで先ほどからお話しにありましたように、文字を知らないということは、それは運命でも神からのおぼしめしでもないもので、それは社会のシステム、政治的なシステムそのものから来ているのだということ。しかし一方で文字を覚えるということは、やはりキチンと覚えなければいけない。そのためには知識を学ぶということには苦痛や困難をとまなうこと。しかしそういうことを通しての楽しみ、喜びを身につけていくのだということが基本にあつて、いまサンパウロで大学の先生達の力を借りながら、子ども達の声を聞き、識字の指導者たちに働きかけをしておられるというのをうかがったわけであります。

そこで、少しくどいかもしれませんが、今、実際に子どもや大人にやっていらっしやる識字の教材と

か教具とか、具体的な方法ということについて少し例をひいてお話しただけでないでしょうか。



フレイレ

教材ということ、ご質問がありましたが、それについてお話に入る前にもう少し基本的な、特に識字にとりくむ先生の訓練ということで、何が基本的な考え方であるべきかということをお話ししておきたいと思います。

長年におよぶ私の識字の経験の中で、今確信をもっているのは、そのような先生方を訓練する上で一番大事なのは、自分達が今している事、そして又、学習する人が何をしているのか、何をしようとしているのか、つまり、私たちと学習者が、今やっている実践を批判的に思考する姿勢です。これをどのようにつり上げるかということが全てではないかと思っています。例えば、色々な教材を、ただ単に蓄積しますと、それは手に入れば入れる程、実践から遠ざかってしまう。ということがあります。しかし、むしろ、一体、今の実践の内部に何が関わっているのか、何がひそんでいるのかということを見ることができるようになればなる程、それは理論と結び付き、そしていい先生が生まれるのではないかと

思います。ですから全て、現実をどうみるかという所から出発するという気がします。

そこで先生方に読み書きをどのように教えるかということをお話する時に、一番いいのは、実際に読み書きを教えていただき、その実践の中から一番いいやり方を発見していくプロセスをどう助けるかという点にあるのではないかと思います。教え方というところで考えてみますと、例えば一五人識字を教える人達を訓練するといったします。その一五人の人達を中心に一五の識字のクラスを作りたいと考えた時に、どのようなやり方をするかということです。

まず、その識字教育を必要とする地域に出かけます。

そして学生達を連れていきます。そこでまず、その地域でいろいろ展開されている民衆の運動、その地域で運動を担っている人達と話をします。運動をしている人達と話をし、自分達がこういう識字を考えているということを説明します。そして私たちのもっている識字の考え方についてどう思うか意見を聞きます。もしその考え方でいいということで受け入れられれば、今度は実際に識字を展開する場所

を見つけるわけです。場所が見つかったら今度そこに参加する非識字者の人達（だいたい一つのクラス二〇人です）二〇人みなさんに私達の持っているプロジェクトについて識字のプログラムの考え方に



ついて、あるいは目標や方法について、いろいろ話をします。なぜそんな事を最初にするかというと、この非識字者の方々こそが、まさに識字に参加する主体となる人達だから、その人達にきっちり最初から目標や手段や方法について分かっておいてほしいからです。そして同時に私達は今、先程申しましたように来年から二、〇〇〇の識字の学習サークルをブラジルで作ろうと思ってますから、その教師の訓練をしなければならぬわけです。そこで識字の勉強にとりくむのと同時に若い人達を識字の教育者として訓練したいということを参加者の方にお願ひするわけです。

そして、もしそれがよければ、これから若い人達も参加して一緒にやっていきましようという事になります。その次にどうなるかと言いますと、その若い識字の教育者たちを実際にそこで組織された識字のクラスに送るわけです。そこで例えば一日に何人というような形で教えさせるわけです。私達のチームは、その教え方をずっと観察します。実際これはアフリカでやって大変成功しました。このように観

察しながら、あなたの教え方で、この点はどうだったとか、あの点はどうだったとかいうことをその次の日にいろいろコメントをするわけです。そういう形で、少しずつ、その人達の持っている識字に対する考え方の理論と、それから実際にやっている実践を照らし合わせながら、私達は識字の教育者になろうとする人達に対して、その実践をコメントするところを通じて理論を教えていくわけです。それも少しずつです。だから最初から識字はこんな理論だということを教えるのではなく、実践でまちがったところや不充分なところにコメントをしながら、理論をそのレベルに合わせて教えていくわけです。

具体的に、例えば月曜日に一五人訓練する学生を連れていくとします。その一五人を二つの識字クラスに

八人と七人という風に分けます。今日はあなた達二人が識字の先生になりなさいということで、そのクラスに指名します。その人達がいろいろと文字の勉強にはいる前に、現実についてどういう認識をもっているかという話し合いを組織したり、そこで最も重要な意味をもつ言葉が何であるかということを見出す

る作業をやっていくわけです。少しずつ、そのような実践を通じて、理論を提供しながら、例えば一日、あるいは一五日もあれば、かなりの学生たちの訓練ができるわけです。その訓練が一定終わった時点で初めて、教材となる文章などを提供します。

このような形でやりますと、最初二〇人ずつの二つのクラスで一五人の若い人達を教師にするプロジェクトを始めるわけですけれども、これが一〇日から二週間ぐらいで、一巡するわけです。それが一巡すると更にそれを元にして、今は二つの識字クラスしかありませんでしたけれども、更に一三、クラスを増やすわけです。そして一つずつのクラスに訓練した一五人の先生を配置します。またそのうちのいくつかをモデルとして、また次の一五人を連れてきて訓練をします。こういう研修のやり方を進めると、例えば三ヵ月位で三〇〇人から四〇〇人ぐらい新しい教師を作ることができるようになります。これはどんどん増殖するような形で新しい教師を作るプロセスです。とどまる所のない教員養成の極めて実践的なやり方、これは来年から、二、〇〇〇の識字教室に

くために今、私ともうブラジルにもどりましたらただちに始めようと思っているプログラムです。

もう一つ、今識字を勉強している人達やある程度文字の読み書きができるようになった人達に対して、これからやりたいと思っているプロジェクトがあるので、それを少しご紹介します。一つは、こういう識字の教育に参加している人達の世界認識を拡大するような、視覚的なビジュアル教材を作りたいと思っています。多くの場合、文字の読み書きに困っている人達は、ある種の囲いの中に補われているというか、つまり自分達の世の中の認識が、自分の住んでいる町だとか、あるいは村だとか、その範囲を越えて広がらないという問題があります。私がやりたいのは、ビジュアルなカセットテープを作って、一〇分か一五分位のもので、最初はサンパウロという街について、色々な側面を写したカセットテープを作って、それを今度はブラジルの他の北東地域、南部地域、色々な所に広げながらブラジルという国がどうなっているのかということを認識するようにしていくのです。最後には、ブラジル全体の地図というか



より正確なブラジル世界における位置が分かるような形で紹介するビジュアルなものを作って、これを今度はラテンアメリカに広げて、更にはヨーロッパやアジアにまで拡大して、世界に対する認識を一步一步、今もっている制約された世界観から広げるような教育を視覚的にやっていきたいというふうに思っています。

特に私が思っているのは、人々は自分達が世界の中でどのような所で存在してるのかということがほとんどわからずにいるということです。しばしば世界認識が自分の住んでいるスラムだけに限られているというようなことが多いものですから、これを広げることが極めて大事ではないかと、そしてそれを世界のレベルにまで広げた時にですね。本当に世の中にどのような権利侵害があるのか、どのような不正義が世界に行われているのかということを認識することになるのです。それからもう一つ、アイデアがあります。例えば

州や市が、衛生・保険に関わっている局長さんというような人を対象にして、その人にインタビュをしに行くわけですね。そして、自分のサンパウロと

いう街についてどういう問題があると感じているかということインタビュで聞き出します。その聞いている様子をテープにとつて、これを来年から予定しております二、〇〇〇という識字の教室へもって行ってですね、二、〇〇〇の教室全部でそれを見せるわけです。それを見せて、この市の当局の責任者はこの街の健康、衛生の問題について、こんなことを言っているというようなことを見て、今度はそれを見た人達がそれについてディスカッションします。その様子をまたテープに収めて、そのテープを今度局長の所へまたもどします。こういう形でやると、実際自分がやろうとしている政策や、自分がもっている問題認識が、一般の人々にどういうふうに認識されているかということとその局長さん自身が直接知る機会を得ることになります。こういう意味で一般の人々と政治の責任ある立場にいる人を結びつけるビジュアルな教材ができるのではないか。これをそれだけではなく、文化担当の局長さん、あるいは大学の総長さん、そういう方をも対象にしたインタビュを行う形で考えました。例えば大学というと、

ブラジルでは一般民衆とはもう隔絶した世界というふうに見られています。非常な距離があるわけですが、その距離を少しでも埋めるように、大学の総長は大学というものをこんなふうに考えているということ、是非識字者の方に見せて、それについていろいろ議論するというような形で距離を埋めていく。こんな形で世界観を広げながら、批判的な思考を育てる教材をぜひ作っていきたいと思っています。

元木

ありがとうございます。今、フレイレ先生の二つのこと、一つは教員養成、指導者養成の非常に具体的なプロセス。もう一つは新しいプロジェクトですね。そこでの教材、とくに視覚的な教材ですね。ビデオテープやスライド、そういうものを使った実例についてお話をいただいたのですが、その点について少し私なりに補足させていただきますと、その教師あるいは指導者ですが、フレイレさんはその場合に、これを調整者と呼んでおられるようでして、すなわち、教師というものは、上に立って学習者と違う文化、違う言葉をもった存在であってはいけな

い。学習者と同じ文化、同じ言葉の中に入っている。そこで調整者なのだということを常々強調しておられます。それから、フレイレさんのお話の中に出てきたのですが、そういうプロセスの中で教師にとっても学習者にとっても自分たちがしようとしていることの意味、それを批判的に見て、批判的な思考を育てていくということを最初に少しふられたと思います。

そのことと関連して、例えば新しいプロジェクトで学習者にテープを見せる、その街の専門家、行政にたずさわる人達の考えを述べてもらい、そのテープを学習者に見せる。そこで学習者が自分達の考えでそれについての批判的な意見を述べる。それをまた専門家や行政官に返していくということです。そういうことは、実にしんどいことだなあと思うわけがあります。フレイレさんの立場というものが。やはりそういう中で、反対者もいろいろと出てくるのであろうな、と思うわけがあります。

それでは時間がだんだんなくなってきましたので、少しまた問題を先に進めまして、今度はもう一度理



念的な課題になるかと思いますが、今日のフレイレ先生のタイトルである「全ての人に文字を」あるいは「全ての人に教育を」というお話に移りたいと思います。

この「全ての人に文字を」という場合に、この世界の中には文字を持たない民族もあるわけでございませぬ。あるいは多民族国家で、それぞれの民族が言葉を持っている。そういう場合、一方で近代国家としての標準語があるわけです。その標準語を無理に押し付けようとすれば、それぞれの民族のもっている文化それ自体を破壊することになるかもしれない。そのあたりをフレイレ先生は常に発言しておられると思うのですが、そこで、「全ての人に文字を」という時に、例えば文字を持たない民族のことをどう考えるのか、そういうこともふまえて、先生のお話をうかがえればと思います。

フレイレ..

「全ての人に文字を」あるいは「全ての人に教育を」というようなテーマを考える時に、いろいろな角度からせまることができると思います。

と思います。つまり、全ての地球上に住む人々は、体系的に教育を受ける権利を基本的人権としてもつていると私は信じています。それは、皮フの色やイデオロギーの違い、政治的な信条、宗教、こういったことと無関係に人間であるがゆえに体系的に教育を受けるという権利は生まれながらにして持っているものだと思います。だから、これは基本的に倫理的な考え方から支持されるものでもありますし、又同時に、さまざまな宗教の立場からみても、同じことが言えるだろうと思います。しかし、これまでの歴史を實際ふり返ってみますと、政治の指導的な立場にある人や権力を握っている人たちは、口では全ての人は文字をもつ権利をもっているとか、あるいは教育を受ける権利があるというふうにおっしゃるんですが、現実にはそうはなっていないで世界は、教育を多くもつ人たちと、一方で教育を受ける権利をうばわれた人たちというふうに、色分けされる現実があります。なぜそうなったのか、何が理由でこういう現実が生まっているのかということを私たちは認識して、全ての人が教育や文字を獲得する権利があるという

観点から闘わなければならないと思っています。だから、願ひするのではなくて、私たちが主体となつて闘わなければならないのです。

今、多くの人々がこのように権力をもつ人たちに対して、自分たちに文字や教育を受ける権利があるんだということを許可をお願いするのではなく闘いとうろくとしていると思います。会場におります私の妻ですが、妻だからほめるわけではないのですが、最近、ブラジルの一五三六年から一九六四年にかけての非識字の歴史、識字史ではなくて非識字の歴史について文字の読み書きのできない人たちを中心に、約一、〇〇〇ページほどの本を大変厳密な研究調査を行つて、書き上げたんです。大変いい本だと私は思っています。その中で、なぜ非識字者が生まれたかということを歴史的にふり返ってみると、必ずそこには、イデオロギーや経済的、社会的な理由があつて、非識字が生まれていたということが、歴史的にも実証されたわけです。その人たちが、能力がおとつたから文字の読み書きができなかったということは全くないわけです。常に権力をもつ人が何らかの理由で読むという

ことを一部の人に不可能なことにしてしまつたとい
うのが、歴史的な事実ではないかと思ひます。

ですから改めて申し上げますが、「全てのの人に文字を」
あるいは「全てのの人に教育を」ということは、全ての
人が基本的人権を行使するということであつて、し
かも、これはただ単に観念的に認識したらそれでい
いというものではなく、具体的な政治的闘いとして、
闘わなければ手にすることはできないと思ひます。

ある意味で権力をもっている人たちがおびえるま
でに、その要求をつきつけていくといひのではないか
と思ひます。それを乗りこえることなしには、差別
も搾取もなくならないと私は思つています。最後に
なりますが改めて、今朝お話しした大阪連絡会の代表
のみなさまや夜間学級をやつてらっしゃる方や、元
木先生も含めてみなさま方が、この国際識字年とい
うユネスコが呼びかけた識字年を機に更に大きく非
識字という問題と闘おうとされていらつしやること
を私は心から敬意を表したいと思つています。(拍手)

ではまだまだお聞きしたいことがたくさんあつたの
でございますが、これで終わつてしまいました。こ
の後フレイレさんは新大阪駅の近くにあります同和
地区に行かれ、実際の日本の識字の学習をごらんい
ただく予定であります。それでは、今日は本当に大
勢の方におこしいただきました。いろいろな立場の
方がそれぞれの受けとり方をされたかもしれませ
ん。私の大変つたないコーディネートで、ぜひ分ご不満
もおありだつたと思ひますが、世界の識字の第一人
者であるフレイレさんにおいていただきまして、直
接お話をうかがう機会を得て、この経験をそれぞれ
にみなさんが大事にして下さり、来年の国際識字年
そしてそこから始まる識字へのとりくみの再出発に
それぞれお役に立てていただければ、幸いです。

どうもみなさん本当にありがとうございました。(拍
手)

フレイレ先生、本当にありがとうございました。(拍
手)



ました。再度みなさま方の絶大なる拍手をもちまして、感謝の意を表わしたいと思います。どうも大変ありがとうございます。(拍手)

それではただ今から、花たば贈呈、更には記念品の贈呈ということで、大阪で識字に関わっているみなさま方の方から贈呈を行っていききたいと思います。

方へ進んでいただきたいと思います。それではまず初めに花たば贈呈でございますが、部落解放同盟大阪府連合会の婦人部長であります、西川英子の方から花たばをおくっていただきたいと思います。よろしくおねがいします。(拍手)

次に記念品の贈呈でございますが、民族差別と闘う大阪連絡協議会のヤン・ウジャさんの方から記念品の贈呈を行います。(拍手)

続きまして記念品の贈呈ですが、読売新聞の大阪本社であります、人権委員会事務局長の大西進さんより贈呈がなされます。(拍手)

どうもありがとうございます。フレイレさんは昨日東京に着かれまして、本日早朝より大阪でこのような形でご講演、そして明日から京都・広島そして東京・青森というふうな形で日本に滞在されますが、これでフレイレさんの講演を終わりますので、みなさまの絶大な拍手でご夫妻を送っていききたいと思います。どうもパウロ・フレイレさん、大変ありがとうございます。(拍手)

●識字教室訪問●

フレイレ夫妻を迎えて

ひのでよみかき教室

八月三十一日の夕方、受講生たちは地球の反対側からのお客さんを『ベンビンドス（ようこそ）フレイレ夫妻』とポルトガル語でかかれた横幕を持って待ちうけていました。夫妻があらわれるとワーツと歓声があがります。「べんびどす」といいながら覚えたにわかつたのあいさつもうまく通じたことか。

よみかき教室での交流に先だって、大賀支部長よ

り「私の母も一九一四年生れで小学校二年位しかいていない。一九三七年生れの私の同級生二十二名のうち半分は義務教育を終えていない。文字を奪われてきたわれわれは、解放運動のなかで文字を学び差別や戦争の中の厳しい生活をつづってきた。今日の講演で、識字とは単に字を教えるところではなく、生活・仕事・おいたちと結びつけながら文字を





々の実践の確かさに自信を深めている。ちょうど日之出において部落解放子ども会が始まって三五年、支部組織ができて三〇年という記念すべき年に御夫妻をお迎えすることができて光栄である。来年の国際識字年の成功と二一世紀にむけて非識字をなくしていくとくみ心から連帯していきたい」と歓迎のあいさつがあった。

フレイレさんは「日本へきたのははじめてだが今日は人間性あふれる人々との出会いをうれしく思っている」こと、また夫人からは南米における抑圧者と女性の識字問題についての研究を最近本に著わされたことが述べられた。

よみかき教室では、三月後にひかえた大阪市識字経験交流会の参加者の激励会を開催しており、そこに加わっていただくことになった。よみかき教室は国際識字年大阪連絡会、ユネスコ、研究者、マスコミや行政関係者の皆さんでいっぱいにくれあがり熱気があふれている。交流会に参加する三名が、緊張しながら分科会で報告する作文を読みあげる。



私の思い出

谷上 梅子

私が「よみかき」に参加したのは、今から一五年も前のことです。

私には、子どもがいなかったのですが養子を取り、育ててきた子が小学校に行き始めた時のことでした。

ある日、テレビを見ていたその子に

「お母ちゃん、あの字なんて読むの

ときかれました。その時、私は、字を知らませんでしたので

「あつ、もう消えてもたわ」

と言つてごまかしてしまいました。その時の私の気持ちには、本当につらく、なさけないものでした。

心のそこから「字を習いたい」と思ったのは、この時でした。

私は六歳ごろから子守りぼうこうに行き、八歳から一四歳頃までいつていたので私は、ぜんぜん学校に行くことができませんでした。

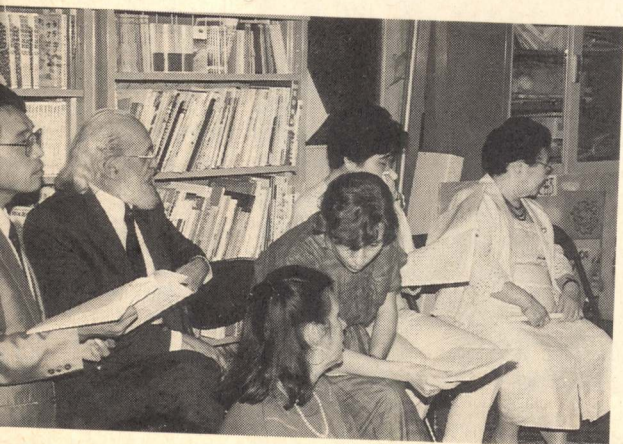
だから、ほとんど読み書きができませんでした。

日之出に「よみかき」があることは知っていましたが、はずかしいという思いと、どうしたら参加できるのかがよくわかりませんでした。しかし、その時、同じ住宅に支部の婦人部長がいて、

「字、知らんをやったら『よみかき』においで」

といつてくれたのがきっかけで参加することになりました。

今は、私の生いたちを書き続けています。特に最近では、私が一九歳ごろ身売りされていた八幡の館に行き、そこでの七年間の思いを書きつづけています。そこでは、つらかったことしか思いだせん。つらくてつらくて、しかたがなく大阪に逃げ帰ったこと。妹分のおながが大きくなり、私は妹分の分までおきやくを、とらなければならなくなりました。それでも私は、体をはって生きてきました。それらの一つでもみんなに伝えたいと今、思っています。



私の体とお母さん

浦浜 麻里

なんで私こんな病氣にかかってしまつてんやろう

治療も薬も開發されていない

こんな動かない体なんかいらない

死んでしまいたい

ずつとずつとそう考えた私

なぜ私がこんな病氣になるの

誰にもなんにも悪いことしてないよ

ある日「あんたも外へ出ていかなあかなあ」

と突然言いだしたお母さん

障害者会館へつれていつてくれた

病氣になつてからの三年間

家から一步も出られず

家の中では四つんばい

毎日毎日泣いてばかり

車いすを押して外に出てくれたお母さん

「いや」その氣持ちだけ

ただ恥ずかしかっただけの私

最近やつとおかあさんも言つた

「車いすを押して出るの私はずかしかった」と

今は平氣です

楽しいです

おしやれもしたいです

お母さん ありがとう

◇

ある日私は、自分の意志で会館に電話をしました。

私は何かをしていかなねばふけ込んでしまふと思ひま

した。いいですよ来て下さいと言われました。今ま

だ行つてあさいけど私は楽しいと思つてます。私も

識字に来るまではあまりよく歩けませんでした。勇

氣をもつて外へ出る決意をしました。今私は識字で

勉強をはじめています。今はだいぶ歩けるようになります

りました。性格も明るく積極的になりました。歩

けるようになったのも病院の先生、お父さん、お母

さん、兄弟や識字の先生たち、友だちのおかげです。



一度しかない人生を

保坂テレシータ

私は、一〇人きょうだいの四番目として、フィリピンで生まれました。父が女の人をつくって家を出て行ってしまったので、みんなで助けあつて生活をしてきました。

高校へ行きながら、レストランでパートとして、夜中まで働いたこともあります。しんどくて、勉強がどんどんわからなくなつて、つらく、はずかしいおもいをしました。

進学もしたかつたけれど、できなかった。この頃は、進学した友達に会うのが、いやでした。

たくさん勉強して、外国で働きたいと思つていたところへ、日本の万博で、フィリピンのパビリオンで働く話がきたのです。二一のとき、日本へきました。まったく、日本語はできなかったけど、その時

は言葉で苦労することになるとは、思いもしませんでした。

日本人の主人と知りあい、結婚して娘ができました。娘が三歳のとき、他の子とくらべて、なんとなく様子がちがうように思つて、病院でみてもらうと、自閉的なところがあると言われました。主人もあまり真面目に働いてくれず、娘が小学校一年生のときに別れました。

主人といるときは、何でも主人まかせでした。保険証の大事さがわからなかつたくらいです。娘として生活していくために、よみかきがいらない仕事としてえらんだ夜の仕事に加えて、昼間も働くことにしました。今は看護の仕事をしていますが、体を使うことが多い仕事です。字がわからないから、したい仕事があつてもできない。とてもくやしかつた。主人に「子どもが病氣やのに、なんで悩めへんのか」とおこられても、どんな病氣なのか意味がわからない。つらかつた。

一度しかない人生を、自分のおもいどおりに生きてみたい。そんな気持ちになつて、今年から識字に

きています。しんどいときも、がんばってきたので、
よみかきも少しずつ上達しています。他の仕事につ

くこと、いろんな本を読むことが私の夢です。がんばります。

身売りされていった体験を若い人々に伝えていく
のが私の使命だというTさん、難病に苦しみながら

うと受講生たちがつくった「しきじ年うちわと風鈴」
が岸婦人部長より夫妻に手渡された。

識字の仲間とともに積極的に生きていこうとしてい
るJさん、日本の社会で生きぬいていくために、文
字と言葉を学んでいるフィリピン人のHさん、皆参
加者の心をうつた。一昨年よみかきでつくったむか
しの日之出のくらしをうつした大型の紙芝居も上演
した。

「あったかいひとやった。」「やさしいかった。」ひ
とときの交流であつたし、フレイレさんと交した言
葉も少なかったが、よみかきの受講生は口々にそう
語る。識字運動の闘士は、もの静かに受講生たちの
語る生い立ちに聞き入っていた。しかし、最後には
識字とは闘いであることを告げ、そしてほんとうに
やさしくひとりひとりを抱きしめた。

フレイレさんからは「長年識字運動をやってきた
がこれほど人間性あふれることばに触れたことはな
い。識字とは闘いである。世の中をかえるために立
ちあがっていこう」と激励をうける。

そのときの受講生のはればれとした顔とともに、
たとえ短くても人と人とは出会えるものであること
を教えられた一日でもあつた。

最後に、国際識字年を地域の人々に知ってもらお



「フレイレ氏と共に」

天理大学 内山 一雄

民族解放の教育学者として、変革の理論と実践の人として、既成の教育学理論の壁を打ち破った存在としてのフレイレ氏、その人に、こんなにも早く、地元の大阪で直接会えるとは予想もしていませんでした。その日、八月三十一日は、終日、フレイレ氏と共に在ることの緊張と興奮が私の体のすみずみまでを満たしていました。

白髪の中から覗く精悍な容貌と対象的なつづらな柔和な目――私は、識字運動の中で、まだ二八歳といっている“と、たくまざるユーモアでのべる本年六八歳のフレイレ氏の運動にかける熱い想いが、こちらにも痛いほど伝わってくるような気がしました。これからブラジルへ帰り、直ちに数

十もの識字学校を組織する運動に取り組むと語るフレイレ氏のバイタリティ、やはり巨人だなあといいと思います。

しかし、そのフレイレ氏が、夕食の際に肉主体の洋食が口に合わず、メロン一つですますことも――「アレルギーです」という同行の夫人の言葉に、巨人の繊細な人間味の一面を垣間見た思いです。

食事の際の話題で、フレイレ氏の識字実践の中で、「ニーナ」と呼ぶ妻の名を、生れて初めて書けるようになった男性の喜び、フレイレ氏の実践に、せめてお礼にと箸一杯のバナナを届けてくれたエピソードなど、幾つもの心に残るものがありました。フレイレ氏は、



が、夫人も東南アジアを含め日本は初めてということ。その印象をおききしたとき、*「大変すばらしい人たちと出会った。献身的に人を愛する*

人たちと出会った*」*という言葉が印象的でした。それは、日之出の識字学級での出会いからにじみ出た想いではないかと思えます。それほどに、日之出でのフレイレ氏との集いは感動的なものでした。

フレイレ氏を囲む日之出識字学級の紙芝居などの実践報告は、地域のかあちゃん方一人一人の精一杯の思いが痛いほど伝わってくる素晴らしいものでした。さらにそれ以上に、後に続いて立ち上ったTさんの生いたちの語りは、居並ぶ人びとすべての胸を打ちました。差別の結果からの身売り、その足跡を尋ねて広島の被爆者との出会い、その方を招いた識字学級での感動など。続いて立った障害と闘う十代のUさんが「識字は、私の生き方を変えた」と報告する——感動の渦の中から、フレイレ氏が語りかけた言葉が印象的でした。

「今の話に、心を強く動かされました。文字を学ぶことを通して、書くことを通して、政治や権力と対決し、世の中の変革に結びつけることが大

切です。これまでの大変な経験を二度とくり返さないためにも、力を合わせて運動しましょう。人間の本当の暖かさを実現しましょう」

このようにのとべると共に、フレイレ氏は、おわりに、英語で「Against lack of Justice Please go ahead、」（不正に対決して闘いましょう！前進しましょう！）とその言葉を結びました。まさに、

日本の、そして世界の識字運動のあるべき方向を示した言葉ではないかと思ひます。

一九九〇年の国際識字年には、ブラジルでも国際的な大集会が持たれるとフレイレ氏はのべています。私たちも、この日本で世界の運動と連帯して、さらに大きな歩を進めて行きたいものです。

オモニたちのパワーを糧に

守口第三中学校夜間学級 平井 由貴子

非識字者が「文字を読めるようになること」とは「世の中をよめるようになること」である。「世界を知る」という過程は中立なんかでありえずイデオロギッシュなことである。

パウロ氏のこの主張を聞いて私は久しく忘れて

いた「政治的人間」という言葉を思い出していた。私たち教師根性のずるいところは、教育の中立性なる大義名分に馴らされ冒されてきた結果、人として明確に正義を語らず、したがって何も行動しないのが習性となつてゐることではないだらう

か。

そんな情けない教師に対して、わが夜間中学のオモニ生徒なら例えばこうである。

——原発がこわいということ、ようわかりました！
いったい私ら何したらよろしやろ!? 署名ですか？
ほかのこと何もできんけど署名やったら私らでも
できますよ！

——旅行で美浜いうところ行くんでしょ。見学に入
ったら、その会社の人に「ええかげんにせえ」
て皆で言うたらどうですか？

——そんなとこで言うたかて痛うも痒うもないで。
もっと上の方の政府の考え変えなあかんのや！

——そんなこと言うても間に合わんがな。私ら
でもできることちよつとでもせな。電気使うの始
末したら危いもん使て電気つくらんかてええやろ。
この頃世の中電気使いすぎや。

——この年になって今さら便利な生活やめんなら
んのはかんにんしてほしいわ。

——そや、先の短い年寄りに昔にもどれいうのは
酷や！それよりもつとっぱい電気使うてる大き

いとこにやめてもらお！

——そやそや、夜の街のネオンいうのんあんなも
んも要らんで！

——テレビかて、いつとき省エネいうとったのに
この頃は夜どおしやつてるやんか。



一つの事実がさし出され、それが既知の知識や生活体験と結びつき、世の中の仕組みの中によりとられるやいなや、いつきにバワフルになるオモ二たち。

こういう瞬間である。教える側の「言葉」の一言一句が掛け値なしの視線に晒され真贋を見ぬかれようとしている！と感じるのは。そして同時に言葉を発した者自身の意識も変革を迫られていると感じるのは。ふしぎなことにこの課題は苦しいものでなく楽しいものである。それはなぜなら「差別社会の存在をすでに知っている」オモ

二たちが、抑圧された怒りをどう昇華させ、明日をどう生きていくべきなのかを、明るくまっすぐ問うている姿勢に教えられ勇気づけられるからだ。ためらうことはない。生きるとは政治的なことだ。被抑圧者がこの世界を学び、知るということは、すぐれて批判的な作業であるし、その世界へどう関わっていくべきかを問いつていく解放のプロセスなのだ。パウロ氏の話は実にすっきりとその辺を整理させてくれた。ためにする教育から脱け出して、ともに学び闘う地歩を固めねばと思う。

勇気づけられた

部落解放同盟大阪府連合会 教育対策部長 田村 賢一

ほとんど予備知識を持たずに、パウロ・フレイ

レさんとの話し合いにのぞみました。

一口で云って楽しい話し合いであり、講演では非常に勇気づけられました。

支配体制によって奪われたり、社会状況の中で



教育を保障する力を持たない国々、国民にとって文字を学ぶということは、「奪われた正義を取りもどす闘い」であり「勇気を持って立ちむかえ」と力説するフレイレさんは、解放同盟のアジテーター以上の迫力を持っていました。

自らの立場を自覚しながら闘いに参加し、さらに自覚を高める事を、部落解放運動の中で子どもから老人まで（子ども会から老人会、識字教室）の活動の中で問題意識を持ちながら、日々運動を積み重ねてきた我々の行動がフレイレさんの口から「被抑圧者の教育学」として発せられ、高名な教育学者によって裏づけられたことの誇りと自信が入り交った感情につつまこまりました。

さらにもう一点感じた事は、日之出支部の識字学級を見学しての感想として「自らの意思で奪われた歴史、すなわち生い立ちをつづる」おばあちゃん達に感動して「欧米ではプライバシーを大事にして生い立ちを語らない、語れない、強制しない風習だが、この取り組み」が人間化、意識化の流れとして取り組まれている事を間のあたりに見

て「ビューティフル」と表現して「ブラジルでもとり入れるよう努力したい」と識字運動の「生いたち」をつづる取り組みを正しく評価するフレイレさんに、(この時は一緒に参加できなかったのですが)話し合いの時にもった感触が間違っていなかったことを再認識しました。

識字年の取り組みが、国内外で大きく広がり、文字を通して連帯が深まり、『意識化』(「…自らと

「ひよ」ひしん人

フレイレご夫妻を京都、奈良、広島にお連れして感じたことを述べたい。

奈良公園でのこと、公園には多くの鹿がいる。フレイレ氏は「いい匂いだ」と言われた。「なぜ、

他者、あるいは現実社会との関係を変革し、人間化しようとする自己解放、相互解放の実践……」被抑圧者の教育学・一九八七—。

した人々を多く作り出す、そのような運動の質をめざす識字年連絡会の出発としてフレイレさんの講演会是我々が多いに勇気づけられたと感謝しています。

日本ユネスコ協会連盟 三宅 隆史

この匂いが好きなのですか」と聞くと、彼の出身地であるブラジル東北部には牛や馬などの動物がおり、鹿の匂いがその土地を思い出させるからだと言われた。十数年も祖国ブラジルからの亡命生

活を余儀なくされ、長く海外での生活を送ったにもかかわらず、ブラジル東北部の匂いをとて愛しているのである。彼の教育理論の基礎はブラジル東北部の貧しい人びとの解放を目的にしていると言われる。何年も経ても、自己の思想の原点となっている現場を愛し続ける感性が大切なのだと感じた。

広島での原爆資料館のこと。見学後、「ここ（資料館）の中では、英語を使う気にはなれない。

このような非人道的な行為は決して許されないことだ」と静かに語られた。核兵器を使用した国の文化である言葉を使いたくないというフレイレ氏の態度を見て、人間性を破壊するすべてのものを拒絶する強い信念をお持ちの方だと思った。

フレイレ氏はよく「教育は政治である」と言われた。彼がスイスに亡命中、当時マルコス政権下のフィリピンのある学校から講演の依頼があったが出発の一週間前になって、依頼していた学校が断ってきた例を挙げられた。「私は教育の話しかないのになぜ私のフィリピン行きが直前になっ

てキャンセルされたのか。私の教育の話が何らかの政治的影響を及ぼすことを恐れた人びとによって何らかの圧力を受けたからだろう」と言われた。教育は、良いイメージで普通語られるが、フレイレ氏が言われるごとく「教育は人間の支配する手段にもなるし、解放する手段にもなる」のである。

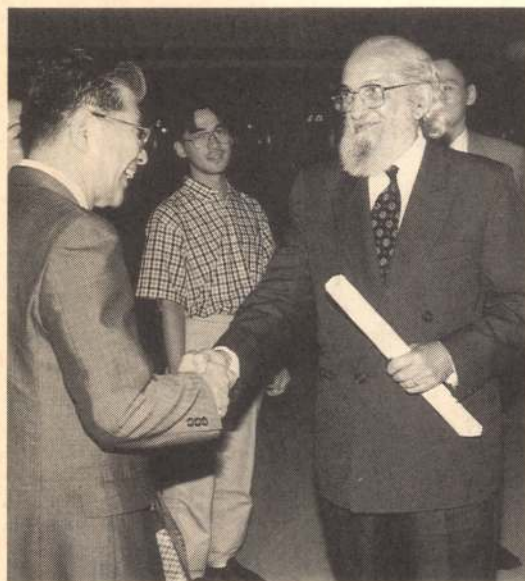
最後にフレイレ夫妻の仲の良さを紹介しておきたい。アナ・マリア夫人は『ブラジルにおける非識字者の歴史』という本を書かれた歴史学者である。日本とブラジルの文化の違いと言ってしまえばそれまでのだろうが、二人の青年の恋人のような関係には一〇日間一緒にいて少々赤面する場面が多かった。フレイレ氏は講演の中で「私は、長い間考えてきたこと（理論）を祖国ブラジルのサンパウロ市の教育長として実践できることに大変な喜びを感じている。現在六八歳だが、二〇歳のような気持ちで今の仕事に取り組んでいる」と言われたが、アナ・マリアさんとの若々しい関係を見て、本当にエネルギーでステキなひとだと思った。

パウロ・フレイレ氏とお会いして

部落解放同盟中央本部 中央執行委員 北山 誠一

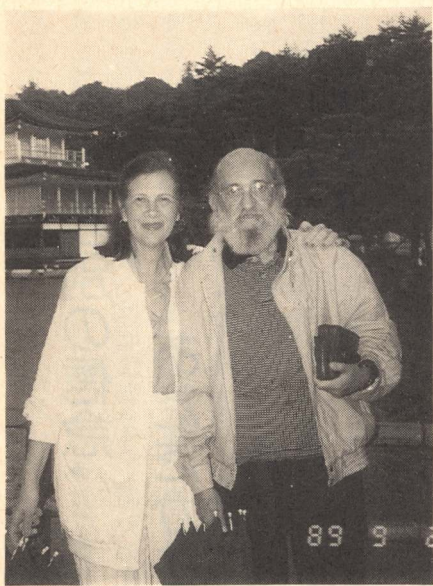
パウロ・フレイレ氏とお会いしたのは、講演会
がはじまる前の控え室においてでした。

わたしたちからの部落問題の説明をじつと聞いて、それを必ずそばに居る夫人に説明をされ、話し合われていました。それがおわってから少しづつ質問をされるのですが、出された質問の中に「部落出身の国会議員はいますか」という問いがありました。差別の解決のために、国がどのような政策をとっているのかは重要な問題であり、その政策を決定していく国会の場に部落出身者がいるのかという内容を意味する質問だったと思います。それはあたりまえの質問なのかもしれませんが、



差別には政治的な背景があり、その撤廃にむけて政治的な闘争をおこなっていかねければならないという氏の思想が強く印象づけられたものでした。

それから、『反差別国際運動』の顧問を是非お願いしたいという急なお願いにも、快くOKをいただきました。『被抑圧者の教育学』が韓国で翻訳され、厳しい弾圧の中でも読まれている」ということもお話しされていましたが、世界中から差別や抑圧をなくすための努力や協力は惜しみ無く



おこなうという氏の姿勢にも大変感銘を受けました。

こんなささいなことではありましたが、パウロ・フレイレ氏は、素晴らしい研究者であると同時に、差別に対する鋭い感性をもった活動家であるのだという思いを強くしました。

「識字とは、単に文字の読み書きを覚えることではなく。世界の現実を知ることができるようになることである」――教える側は、非識字者の持っている言葉、文化、環境などを理解・尊重したうえで活動しなければ真の効果はあがらない。」――
「識字は基本的人権であり、闘って勝ち取られなければならぬ。非識字がなくなっただけで世界から様々な差別が消え、人間が解放される。」

パウロ・フレイレ氏が話されたこれらの言葉は、まさに部落解放運動の思想と同じものであり、わたしたちに大きな勇気と確信を与えて下さいました。今後ますますお元気で活躍いただき、部落解放運動や、識字運動へのご助言をいただきます。

反差別の信念、

あたたかさ、そして企画力

森 実

フレイレ氏が大阪に来られたさい、私はカメラマンをかねて、一日いっしょに行動させていた。そのおかげで、本や講演だけでは十分わからなかったフレイレ氏の一面を見ることができたように思う。

印象に残っているのは、講演当日の夕食を食べていたときのことである。昼間に行なわれた講演の内容に関わって、質問が出された。

一つは、「あなたは、被差別者、被抑圧者の解放ということをよくおっしゃるが、それでは差別する者、抑圧している者の解放はどうなるのか」

という質問である。これに対する氏の回答は、「差別者、抑圧者の解放は、被差別者、被抑圧者の解放に従属する」というものだった。

もう一つは、「文字をもたない社会があるが、識字を進めることで、そういう社会のよさがつぶされないか」という質問である。これに対して氏は、次のように答えた。「確かにそういう社会に支配者の文字を押しつけるのは誤りだ。しかし、今日では、そういう社会も世界から孤立して存在することはできない。支配や侵略の意図をもちつつ接触を求めてくる者が存在するもとので、自らを

守るためにも識字は基本的に必要だ。もちろん、自分達の文字を育てることが、第一にされるべきことだ。」

さらに、こんな質問もあった。「これまで識字に取り組んでこられて、印象に残っている学習者には、どんな人がいますか。」これに対しては、即座に三人の人をあげて答えた。そうした人のことについては、いずれ本にしたいというお話であった。

そのほかにも、話はいろいろとはずんだが、氏のひとことひとことに力強さと確かさを感じた。

夕食後、日之出地区の識字を見せていただいた。このとき不思議だったのは、氏が部落での識字の場においてぜんぜん不自然ではないことだ。もちろん、迎合するわけでもない。参加者が自分の生い立ちの作文を涙しながら読んでいる姿に感動しながら、「けれども、書くだけではなく、聞いに立ち上がるが必要だ」と発言する。解放同盟日之出支部の大賀支部長は、「日頃私が言っていることをかわって言ってくれた」と返した。帰るこ



ろには、ごく当然のように学級生と手を取り合い、抱き合っている。何十年も識字に取り組んできた人なのだからあたりまえだと言われればそれまでだが、日本に同じ雰囲気をもっている人は、どれほどいるのだろうか。

この後、氏は「ビューティフル・デイ」と何度

もいわれていたように思う。

九月五日に、東京で「ユネスコ・東京フォーラム」が開催され、何人かのパネリストが発言した。その一人としてフレイレ氏は、「識字の国際会議がこのように開催されても、その場に識字で学んでいる人が参加していることがほとんどない。来年（一九九〇年）にサン・パウロで世界識字学級生経験交流会を開こうと思う。ぜひ参加してほしい

い。」と述べられた。私には、大阪での経験が、氏の発言の背景にあつたのではないかと思えた。大阪での夕食のさいにも、サン・パウロでどのような取りくみを進めるか、いろいろと語っていたが、信念とあたたかさだけでなく、それを政策として作り上げていく力をもっている点が魅力だ。何が今日の彼をつくりあげたのか、考えてみたい問題である。

フレイレ氏の教育観

フレイレ哲学への関心は、ハーバード教育大学院のいくつかの授業で、氏の著作が指定文献になっていたことに始まる。いまから八年ほど前のことであり、「七〇年代に世界で最もよく読まれた

大阪大学講師・通訳 平沢 安政

のがフレイレ氏の著作である」ということからすると、時流に遅れていたと言えなくもない。恥ずかしいことだが、「被抑圧者の教育学」(Pedagogy of the Oppressed) が邦訳ですでに出版されてい



たことも知らなかった。さて、大学院の授業だが、例えば、「第三世界の教育研究」という科目で、「第三世界の人々自身による教育計画作り」というテーマを議論したり、また「コミュニティー心理学」という科目で、「地域社会が力を発揮するため(enhancement)に必要な哲学」を扱ったりした時に、必ずフレイレ哲学が大きなテーマになった。これら以外にも、ブラジル、メキシコ、チリなどラテンアメリカからの留学生、ナイジェリア、リベリアなどアフリカの留学生、さらにフィリピンや韓国の留学生の中に、またアメリカの学生にも多くのフレイレ「信奉者」がいて、とにかくいろいろな場面でフレイレ哲学を議論した。それまで、ほとんどフレイレ氏のことを知らなかった私は、これほどに関心を集める教育者の存在に強い興味を持ち、「人間解放の教育」を模索する中で、氏の文献を一通り読むことになった。

フレイレ氏が大学院の特別講義にこられたのは、ちょうどそんな時だった。一九八二年の夏、満員の講義室で氏の哲学が語られた。フレイレ氏にと

って英語が母国語でないことも加わって、講義は難解であった。しかし、私の中にできつつあった氏の哲学に対するイメージは、この講義を通じて一層明確になった。二点にまとめらるなら、「非識字者の問題意識と現実認識から出発する」こと、「ことばを読むとは、世界を読み、世界を変革することである」ということであった。この二つは、「差別の現実から学ぶ」という同和教育の原則であり、日本の識字運動の精神そのものだと感じた。

その後、識字をめぐる日本の状況について研究発表をしたり、アメリカの識字について学んだりしながら、識字が単に「第三世界」や「マイノリティ」に限定された問題ではなく、人間の「自立と協働」という根本的な営みに深くつながっているという認識を深めた。また、情報化やテクノロジーの発展を通じて、必要とされる識字能力も当然変化していくことに気づいた。識字者と非識字者という二つの集団に分けるデジタル思考ではなく、識字が連続性を持った尺度でアナログ的に定義されるものであるという見方が大切だと

感じるようになった。その意味では、識字は「もたざる人々への温情主義」で「与える」ものではなく、全ての人々が獲得し、再獲得していく対象となる。しかし、これだけでは、「より持てるもの」と「より持たざるもの」という量的な見方を超えることはできない。ここでフレイレ氏の哲学が大切になる。つまり、識字は批判的思考を身につけ、社会変革に参加するプロセスであるという質的な問題への認識が重要になる。

いま、大学で識字をテーマに講義すると、「To read the word is to read the world and to change the world」というフレイレ氏のことばが学生に強い印象を残すようだ。ことばが人間にとって本質的であるが故に、氏の哲学はそれだけ深く、多くの人々にアピールするのであろう。今回の大阪講演でも、フレイレ氏はword(ことば)とworld(世界)をキーワードに話を始められ、教育が政治的行為であること、そしてすべてが被抑圧者から出発することを強調された。通訳しながら、自分なりのフレイレ哲学の「読み」が間違っていないか

ったことがわかってうれしかったが、一方で、氏のことは文化と言語の壁を越えて伝達するのはきわめて「しんどい」ことであつた。通訳が十分なためにフレイレ氏のメッセージが完全に伝わっていなかったとしたら、この場を借りておわびしたい。

さて、今回の講演では、サンパウロ市の教育長という立場で学校教育全体の改革に取り組まれている様子をおうかがいしたが、これはまったく知らなかった。最近の氏の著作が、識字だけでなく、教師の立場性や学校教育のカリキュラムの問題まで含んだ幅広い分析に移行しているのは感じていたが、それも氏の立場性の変化によるものであることがわかつた。フレイレ哲学による学校教育改革のとりくみは、大変興味深い。今後、識字運動と教育改革を連動させるためにも、氏のチャレンジから学ぶ必要がある。



A・A・L・A教育文化叢書

被抑圧者の教育学

パウロ・フレイレ著

自由のための文化行動

パウロ・フレイレ著

伝達か対話か

パウロ・フレイレ著

亜紀書房発行

A・A・L・A教育文化叢書

民族解放の教育学

小沢 有作 編

部落解放研究所紀要『部落解放研究』

第三三号 識字運動の国際連帯に向けて

——パウロ・フレイレと解放の思想——

平沢 安政

岩波書店『世界』

第五三七号 世界を読む、文字を読む

——「国際識字年」に向けて——

パウロ・フレイレ

四十八歳の夜間中学生

オモニの歌

岩井好子



全読定できるのに算数でせん

夜間中学に学ぶオモニたち——彼
れらの苦闘の半生と学校への道歌。

新刊

岩井好子 定価430円(本邦437円)

四十八歳で初めて学校にいった在日朝鮮人オモニが、苦難の半生と学ぶことの喜びを語る感動の記録。世界一の就学率をほこる日本にも、教育を受ける機会を逃した人々が全国に数万いる。その多くは在日朝鮮人、被差別部落の人たちである。夜間中学に集まる彼らの姿を描きながら、その中で最も典型的な在日朝鮮人オモニの一生を聞き書きで追う。

解説 小沢有作

識字運動とは

国際識字年を機に

元木 健 内山一雄

●世界の識字運動		元木 健
1 国際識字年とは	——	7
2 世界の識字率	——	9
3 世界の識字率の推移	——	13
4 識字運動の発展	——	18
5 国際識字年とは何か	——	23
●日本の識字運動		内山一雄
1 識字運動の歴史	——	28
2 識字運動の現状	——	29
3 識字運動の発展	——	34
4 識字運動の発展	——	44
5 識字運動 —— その発展と展望	——	73
おわりに	——	83
資料 1 国際識字年に関する国際的な決議	——	88
2 国際識字年の国際的な推進とその発展	——	89
3 識字運動の発展と展望	——	109

岩井好子研究

識字運動とは

国際識字年を機に

元木 健 内山一雄



岩井好子研究

18

元木 健・内山一雄
識字運動とは

一九九〇年の国際識字年を機に、二〇〇〇年までに非識字の克服をめざす世界と日本の現状と課題を紹介。

おおさかとの対話 —パウロ・フレイレ氏大阪訪問報告—

1990年2月

発行 国際識字年推進大阪連絡会
大阪市浪速区久保吉1-6-12
